

日本で生まれ成長した外国にルーツを持つ若者のアイデンティティ

—経験、記憶、意識に関する語りからの考察—

五味侑奈（東京女子大学大学院生）

1. 研究目的

フィリピン系ニューカマーの子どものエスニックアイデンティティをエスノグラフィーの手法によって調べた三浦（2015）では、いわゆる「日本人」の容姿と名前を持つ日本生まれのある日比国際児が、学校において自身が「ハーフ」であることを特段表明しなかったにもかかわらず、英語の授業中に「英語の発音がうまい」ことを指摘された際に初めてクラスメートの前で「ハーフ」であることを告白した場面について述べられている。小泉（2011）は、多言語話者のアイデンティティについて、当事者が主体的かつ戦略的に選択し形成されていくものであると指摘しているが、先述の日比国際児はまさに戦略的にアイデンティティを選択し形成していると言えるだろう。それでは、容姿や名前がいわゆる「日本人」ではない日本生まれの子どもはどのようにアイデンティティを形成しているのだろうか。

筆者は、2014年夏より外国にルーツを持つ子どもを対象とした地域学習教室に携わっており、そこでの活動を通してホセ、ミゲル、カルロス（いずれも仮名）に出会った。ホセとミゲルは兄弟である。3名の共通点としては、①日本生まれ、日本育ちである、②1990年代後半生まれである、③日本国籍ではない、④両親またはどちらかの親が1990年代にスペイン語圏の国より来日している、⑤公立高校を卒業後、大学もしくは専門学校に進んでいる、⑥容姿および名前がいわゆる「日本人」ではないことが挙げられる。本研究では、3名のアイデンティティ形成を明らかにすることを目的とする。

2. 研究概要

調査協力者である3名の2018年12月時点の状況だが、ホセは大学4年生であり、ミゲルは2018年4月より沖縄県内のホテルで働いている。2人の両親は1990年代にペルーより来日したスペイン語母語話者である。カルロスは大学2年生で、2018年8月よりスペインに語学留学をしている。父親はパラグアイで生まれ育った日系人である。両親の離婚により、小学2年生の頃からコロンビア出身でスペイン語母語話者である母親と2人で暮らしている。

2016年9月から2018年10月にかけて、それぞれに半構造化インタビューを行った。インタビューを行った回数、時期、時間については表1の通りである²⁾。

表1 調査データ

	1回目	2回目	3回目	4回目
ホセ	2016年11月16日 (1時間)	2018年2月28日 (1時間40分)	2018年6月14日 (1時間50分)	2018年9月10日 (30分)
ミゲル	2016年9月28日 (1時間30分)	2018年2月22日 (1時間50分)	2018年9月9日 (1時間15分)	
カルロス	2018年4月25日 (1時間10分)	2018年6月6日 (30分)	2018年10月25日 (1時間10分)	

インタビューでは、主に①幼少期から現在までの言語使用、②幼稚園から大学／専門学校までで印象に残っている出来事や人物、③スペイン語に対する意識(自身のスペイン語能力評価も含む)、④自分についての意識(例：性格、エスニシティ)、⑤将来の夢や目標について質問した。インタビューは毎回許可を得た上で録音し、文字化したものを分析データとして用いた。分析方法には「分析カテゴリー」(箕浦 1999)を採用し、①ことばに関する経験、記憶、意識、②学校生活における経験、記憶、③将来に対する意識、④自分についての意識、の4つのカテゴリーを析出し、カテゴリーごとに分析を行った。

3. 結果と考察

いわゆる「日本人」ではない容姿と名前を持つ3名は、初対面の人から「なに人？」と聞かれたり英語で話しかけられたりするなど、「外国人」というまなざしを向けられることが多い。そのような状況のなかで、ホセとカルロス自身を「外国人」にも「日本人」にもどちらにもなれる存在と位置づけ、自分の「都合」に合わせてその都度選択していた。かれらが自身をそのような位置づける要因として、高い日本語能力を持ち、さらに日本文化を習得しているという強い自信が挙げられる。また、カルロスは母親や大学で知り合ったペルー人の友人がよく職務質問を受けることについて、「犯罪とか犯してるのは外国人だから一、まあしょうがないかなって」と語っており、そのような「外国人」に関するネガティブな言説もカルロスのアイデンティティの選択に少なからず影響を与えていると考えられる。一方、ミゲルは2人とは異なり自身を「外国人」に位置づけていた。しかし、それは受け身的なものではなく、スペイン語話者である自分を受け入れてくれる仲間の存在や、日本語以外の言語が話せることが高く評価される社会状況を拠り所として、自身の「存在証明」(石川 1992)のために戦略的に「外国人」を選択していた。

外国にルーツを持つ子どもたちは、将来的にグローバル市民として社会で活躍する可能性を秘めている(カルタビアーノ宮本 2014)。今回の研究結果を踏まえ、かれらの持つ可能性を実現するために保護者や教育者、支援者が出来ることを考えていきたい。

注)

- 1) インタビューは全て直接会って行った。ただし、カルロスの3回目のインタビューはカルロスがスペイン留学中であつたためインターネット通話を利用した。
- 2) 小学2年生の頃、ある児童から「ガイジン」とからかわれていたという。

【引用文献】

- 石川准(1992)『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』新評論
- カルタビアーノ宮本百合子(2014)「第3章 子どものアイデンティティ交渉」宮崎幸江編『日本に住む多文化の子どもと教育ーことばと文化のはざままで生きる』上智大学出版、pp.49-87
- 小泉聡子(2011)「第5章 多言語話者の言語意識とアイデンティティ形成ー『ありたい自分』として『自分を生きる』ための言語教育」細川英雄編『言語教育とアイデンティティーことばの教育実践とその可能性』春風社、pp.138-158
- 三浦綾希子(2015)『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ 第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房
- 箕浦康子編(1999)『フィールドワークの技能と実践ーマイクロエスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房